

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530624

研究課題名(和文) 青年期における不登校傾向の測定に関する研究

研究課題名(英文) Measurement of School Non-attendance Tendency in Adolescents

研究代表者

堀井 俊章 (HORII TOSHIAKI)

国立大学法人横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：70306083

研究成果の概要(和文)：本研究は青年期における不登校傾向の測定に関する調査研究である。主な結果は次の通りである。すなわち、青年期の不登校傾向を客観的に測定する有用な尺度が開発された。尺度は心理測定尺度として一定水準以上の信頼性と妥当性を備えていることが確認された。また、新たに開発された不登校傾向尺度を用い、不登校傾向の規定要因が検討され、その結果に基づき、青年期における不登校問題を予防・支援するための指針が提示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to examine students' tendency toward non-attendance. The main findings were as follows: (1) The scale to measure students' tendency toward non-attendance was developed. (2) Factors which caused non-attendance were found. (3) Strategies that prevented non-attendance were presented.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：不登校傾向、尺度開発、青年期心性

1. 研究開始当初の背景

初等中等教育機関における不登校問題については、これまで国内外において数多くの研究が蓄積されてきた。しかし、大学を中心とした高等教育機関における不登校問題に関する実証的研究は寡少である。

平成12年6月、当時の文部省の答申「大学における学生生活の充実方策について(報告)―学生の立場に立った大学づくりを目指して―」の中で、大学生の問題として「不登校」が取り上げられ、その対応が重要視された(文部省高等教育局, 2000)。近年においても日本学生支援機構(2007)の報告書「学生相談体制の充実方策について」の中で不登校傾向の学生の把握・面談・連絡等が言及されている。確かに不登校になってからの対応も重要ではあるが、問題の悪化を未然に防ぐとい

う予防的観点からは、不登校の前兆ともいわれる不登校傾向への対応がより一層重要と考えられる。事実、筆者はここ十数年学生相談活動に従事してきた中で、不登校傾向者からの相談が顕著に増加していることを把握し、迅速に対応することの意義を見出した。また近年、大学生約5,000名を対象に質問紙調査を実施した結果、欠席傾向の学生が全体の約10%、登校回避感情を持つ学生が全体の約50%にのぼることを報告した(堀井, 2006)。

不登校傾向を規定する要因についても、初等中等教育機関を対象とした研究では明確になりつつあるものの、大学を中心とした高等教育機関においてはその解明が遅れている。その一因は青年期の不登校傾向を客観的に測定するツールの未完成等のため実証研

究が進展しないことによるものと考えられる。

(引用文献)

・堀井俊章 大学生における不登校傾向の実態調査. 山形大学保健管理センター紀要, 5, 62-67. 2006.

・文部省高等教育局 大学における学生生活の充実方策について(報告)―学生の立場に立った大学づくりを目指して―. 2000.

・日本学生支援機構 学生相談体制の充実方策について. 2007.

2. 研究の目的

本研究は青年期の不登校傾向を客観的に測定する有用な尺度を構成し、信頼性と妥当性を検討する。また、新たに開発された不登校傾向尺度を用い、不登校傾向の規定要因を検討し、青年期における不登校問題を予防・支援するための指針を作成することを目的とした。研究の成果は、近年社会問題となっているニートやひきこもりの予防のためにも意義があると考えられる。

3. 研究の方法

不登校傾向を正課活動に対する回避傾向と定義した上で不登校傾向を測定するための項目を収集し、尺度構成を行い、信頼性と妥当性の検討および規定要因の検討を行った。調査協力者全体は大学生を中心とした一般青年(15歳から20代後半。高校生、大学生、大学院生)とし、質問紙法による集団調査を実施し、収集されたデータに対し統計処理を行った。さらに、結果に基づき、不登校問題を予防・支援するための指針を提示した。なお、調査時には調査協力者に本研究の趣旨を口頭および文書で十分に説明し、賛同する者のみを対象とした。

4. 研究成果

(1) 不登校傾向尺度の構成

①項目収集

一般青年のデータ(質問紙法による収集データ、面接事例、文献等)から不登校傾向を表す記述を収集整理した。ワーディング処理を施し項目化した上で、臨床心理士・教員の精査を受け、内容的妥当性を有すると判断された項目を精選した。

②尺度構成

質問紙調査によりデータの収集を繰り返し行い、項目分析および因子分析(主因子法プロマックス回転)を行った結果、不登校傾向尺度は登校を回避する行動面を測定する下位尺度(以下、登校回避行動)と、登校を回避する感情面を測定する下位尺度(以下、登校回避感情)の2タイプの下位尺度から構成された。Cronbachの α 係数は、登校回避行動、登校回避感情ともに.80以上であり、2つの下位尺度は高い内的整合性を有することが確認された。

(2) 不登校傾向尺度の信頼性と妥当性の検

討

①尺度の信頼性

不登校傾向尺度の信頼性を検討するために一般青年を対象とした複数のデータに基づき、それぞれCronbachの α 係数と再検査信頼性係数を算出した結果、十分な値が得られた。これらの結果から尺度の内的整合性の高さが再確認され、安定性も適度であることが確認された。

②尺度の妥当性

不登校傾向尺度と年間欠席日数との相関係数を算出した結果、登校回避行動では.59($p<001$, $n=190$)、登校回避感情では.33($p<001$, $n=190$)となり、ともに有意な正の相関が得られ、尺度得点が高いほど欠席日数が多くなることが確認された。

次に、不登校傾向尺度の妥当性を検討するために、不登校傾向と、関連が予想される心理的特性との関連を分析した(主な結果のみ表に示した)。

1) 不登校傾向と対人恐怖心性との関連1

対人恐怖心性を測定する尺度には、主に対人恐怖心性尺度(堀井・小川, 1996, 1997)と対人恐怖心性尺度II(堀井, 2006)がある。前者は古典的な森田神経質の恥の心性に由来する対人恐怖心性を測定する尺度であり、後者は近年のおびえの心性に由来する対人恐怖心性を測定する尺度である。

不登校傾向尺度と対人恐怖心性尺度との相関係数を表1に示した。

表1 不登校傾向尺度と対人恐怖心性尺度の相関($n=204$)

	登校回避行動	登校回避感情
自分や他人が 気になる悩み	.06	.21**
集団に溶け込 めない悩み	.13	.29***
社会的場面で 当惑する悩み	.22**	.38***
目が気になる 悩み	.23**	.41***
自分を統制で きかない悩み	.31***	.39***
生きることに疲 れている悩み	.22**	.41***

*** $p<.001$, ** $p<.01$

登校回避行動は社会的場面で当惑する悩み、目が気になる悩み、自分を統制できない悩み、生きることに疲れている悩みと有意な正の相関を示した。また、登校回避感情は、自分や他人が気になる悩み、集団に溶け込めない悩み、社会的場面で当惑する悩み、目が気になる悩み、自分を統制できない悩み、生きることに疲れている悩みと有意な正の相関を示した。特に、登校回避感情は目が気になる悩みおよび生きることに疲れている悩みとかなりの相関を示した。

2) 不登校傾向と対人恐怖心性との関連 2

不登校傾向尺度と対人恐怖心性尺度 II との相関係数を表 2 に示した。

表 2 不登校傾向尺度と対人恐怖心性尺度 II の相関 (n=5042)

	登校回避行動	登校回避感情
劣等恐怖	.12***	.33**
被害恐怖	.29***	.37***
孤立・親密恐怖	.24***	.36***
自己視線・醜形恐怖	.25***	.38***
加害恐怖	.26***	.35***

*** p<.001

登校回避行動および登校回避感情は、劣等恐怖、被害恐怖、孤立・親密恐怖、自己視線・醜形恐怖、加害恐怖と有意な正の相関を示した。

3) 不登校傾向と抑うつ性との関連

不登校傾向尺度と Zung による SDS 自己評価式抑うつ性尺度 (福田・小林, 1973) との相関係数を表 3 に示した。

表 3 不登校傾向尺度と SDS 自己評価式抑うつ性尺度の相関 (n=251)

	登校回避行動	登校回避感情
抑うつ性	.30***	.40***

*** p<.001

登校回避行動および登校回避感情は、抑うつ性と有意な正の相関を示した。特に登校回避感情は抑うつ性とかなりの相関を示した。

4) 不登校傾向と精神健康との関連 1

不登校傾向尺度と全国大学保健管理協会による UPI 学生精神的健康調査 (松原, 1995) との相関係数を表 4 に示した。

表 4 不登校傾向尺度と UPI 学生精神的健康調査 (n=5042)

	登校回避行動	登校回避感情
UPI (不健康度)	.12***	.35***

*** p<.001

登校回避行動および登校回避感情は、UPI 学生精神的健康調査と有意な正の相関を示した。

5) 不登校傾向と健康との関連 2

不登校傾向尺度と日本版 GHQ 精神健康調査票 (中川・大坊, 1985) との相関係数を表 5 に示した。

表 5 不登校傾向尺度と日本版 GHQ 精神健康調査票の相関 (n=166)

	登校回避行動	登校回避感情
身体的症状	.14	.28***
不安と不眠	.22**	.20**
社会的活動	.14	.11
うつ傾向	.31***	.28***

*** p<.001, ** p<.01

登校回避行動は、不安と不眠、うつ傾向と有意な正の相関を示し、登校回避感情は、身体的症状、不安と不眠、うつ傾向と有意な正

の相関を示した。

6) 不登校傾向と心理的 well-being との関連

不登校傾向尺度と心理的 well-being 尺度 (西田, 1973) との相関係数を算出した結果 (n=251)、登校回避行動は人格的成長、人生における目的と有意な負の相関を示し、登校回避感情は人格的成長、人生における目的、自律性、自己受容、環境制御力、積極的な他者関係と有意な負の相関を示した。

7) 不登校傾向と生きがいの関連

不登校傾向尺度と PIL テスト日本版 Part A (PIL 研究会, 1998) との相関係数を算出した結果 (n=166)、登校回避行動および感情登校回避感情は、PIL テスト日本版 Part A と有意な負の相関を示した。

8) 不登校傾向と精神的回復力との関連

不登校傾向尺度と精神的回復力尺度 (小塩ら, 2002) との相関係数を算出した結果 (n=250)、登校回避行動および登校回避感情は、新奇性追求、感情調整、肯定的未来志向と有意な負の相関を示した。

9) 不登校傾向と楽観性との関連

不登校傾向尺度と楽観性尺度 (吉村, 2007) との相関係数を算出した結果 (n=120)、登校回避感情は、前向きさと有意な負の相関を示した。

10) 不登校傾向と自尊感情との関連

不登校傾向尺度と Rosenberg による自尊感情尺度 (山本ら, 1982) との相関係数を算出した結果 (n=240)、登校回避行動および登校回避感情は、自尊感情と有意な正の相関を示した。

11) 不登校傾向と自意識との関連

不登校傾向尺度と自意識尺度 (菅原, 1984) との相関係数を算出した結果 (n=239)、登校回避感情は公的自意識と有意な正の相関を示した。

12) 不登校傾向と自己開示状況との関連

不登校傾向尺度と自己開示傾向を測定する開示状況質問紙 (遠藤, 1989) との相関係数を算出した結果 (n=239)、登校回避行動は家族的状況と有意な負の相関を示した。登校回避感情は個人的状況、社会的状況、非日常的状況、密接的状況、家族的状況と有意な負の相関を示した。

13) 不登校傾向と Locus of Control との関連

不登校傾向尺度と Locus of Control 尺度 (鎌原ら, 1982) との相関係数を算出した結果 (n=120)、登校回避感情は、内的統制感と有意な負の相関を示した。

14) 不登校傾向と完全主義との関連

不登校傾向尺度と新完全主義尺度 (桜井・大谷, 1997) との相関係数を算出した結果 (n=251)、登校回避行動は、完全要求、高目標設定、行動疑念と有意な負の相関を示し、登校回避感情は、高目標設定と有意な負の相

関を示し、失敗過敏と有意な正の相関を示した。

15) 不登校傾向と達成動機との関連

不登校傾向尺度と達成動機測定尺度（堀野, 1991）との相関係数を算出した結果（n=251）、登校回避行動は自己充實的達成動機と有意な負の相関を示し、登校回避感情は、自己充實的達成動機と有意な負の相関を示し、競争的達成動機と有意な正の相関を示した。

16) 不登校傾向と成功恐怖との関連

不登校傾向尺度と成功恐怖測定尺度（堀野, 1991）との相関係数を算出した結果（n=251）、登校回避感情は対人的配慮、成功の否定的感情、優越欲求の少なさと有意な正の相関を示した。

17) 不登校傾向と劣等感との関連

不登校傾向尺度と劣等感項目（高坂, 2008）との相関係数を算出した結果（n=166）、登校回避行動は家庭水準の低さ、性格の悪さ、統率力の欠如と有意な正の相関を示し、登校回避感情は友達づくりの下手さ、統率力の欠如と有意な正の相関を示した。

18) 不登校傾向と孤独感との関連

不登校傾向尺度と孤独感の類型判別尺度（落合, 1983）との相関係数を算出した結果（n=239）、登校回避行動および登校回避感情は、人間同士の理解・共感の可能性と有意な負の相関を示した。

19) 不登校傾向とアパシー傾向との関連

不登校傾向尺度とアパシー心理性格尺度（下山, 1995）との相関係数を算出した結果（n=204）、登校回避行動は張りのなさ、味気のなさと有意な正の相関を示し、登校回避感情は張りのなさ、自分のなさ、味気のなさとの有意な正の相関を示した。

20) 不登校傾向と進路未決定との関連

不登校傾向尺度と進路未決定尺度（下山, 1986）との相関係数を算出した結果、登校回避行動は未熟、混乱、猶予、安直と（n=194）有意な正の相関を示した。

21) 不登校傾向と自我発達上の危機状態との関連

不登校傾向尺度と長尾(1989)による自我発達上の危機状態尺度との相関係数を算出した結果（n=250）、登校回避行動は、同一性拡散、自己収縮、自己開示対象の欠如、緊張とその状況の回避、精神衰弱、稀な体験や精神・身体的反応、閉じこもり、身体的疲労感、対人的過敏性と有意な正の相関を示した。登校回避感情は、決断力欠如、同一性拡散、自己収縮、自己開示対象の欠如、実行力欠如、緊張とその状況の回避、精神衰弱、身体的痛み、稀な体験や精神・身体的反応、閉じこもり、身体的疲労感、対人的過敏性と有意な正の相関を示した。

22) 不登校傾向と投影法によるパーソナリテ

ィとの関連

不登校傾向尺度と P-F スタディとの相関係数を算出した結果（n=104）、登校回避行動は障害優位型 0-D と有意な正の相関を示した。

以上の結果、不登校傾向尺度は内的整合性および安定性を備え、欠席日数との相関も持ち、関連が予想される尺度との関連についても概ね予想通りの結果が得られた。したがって、不登校傾向尺度は心理測定尺度として一定水準以上の信頼性と妥当性を有することが確認された。

(3) 不登校傾向の規定要因

前項では不登校傾向尺度の妥当性を検討するために不登校傾向尺度と、関連が予想される尺度との関係について相関分析を行った。関連が予想される尺度で測定される心理的特性が不登校傾向に影響を与えると仮定し回帰分析を行った結果、相関で有意であった箇所の大半は有意であった。ここでは前項で扱わなかった心理的特性および性差・学年差の要因を取り上げ分析を行った。

1) 不登校傾向と大学生活との関連 1

不登校傾向尺度を従属変数とし福盛ら(2001)の大学生生活チェックカタログと性別を独立変数とし重回帰分析を行った結果を表 1 に示した。

表 1 不登校傾向尺度と大学生生活チェックカタログの重回帰分析 (n=259)

	登校回避行動 (β)	登校回避感情 (β)
自己不確実感・不安	.00	.14
社会的関係	.04	.11
現在のいきがい・充実	-.17*	.00
自己肯定感	.10	.05
将来への展望	.00	-.04
大学内学習	-.45***	-.33***
積極性	.15*	.09
大学全体への満足感	-.09	-.34***
睡眠・食欲・体調	-.09	-.10
仲間との活動	.13*	.02
無気力	.10	.06
大学外学習	.07	-.05
(性別)	-.03	.06
R ²	.32***	.31***

*** p<.001, * p<.05

登校回避行動には積極性、仲間との活動が有意な正の影響を及ぼし、現在のいきがい・

充実、大学内学習が有意な負の影響を及ぼした。また、登校回避感情には大学内学習と大学全体への満足感が有意な負の影響を及ぼした。

2) 不登校傾向と大学生活との関連

不登校傾向尺度を従属変数とし藤井(1998)による大学生活不安尺度と性別を独立変数とし重回帰分析を行った結果を表2に示した。

表2 不登校傾向尺度と大学生活不安尺度の重回帰分析 (n=259)

	登校回避行動 (β)	登校回避感情 (β)
日常生活不安	.29**	.01
評価不安	-.26**	.06
大学不適応	.32***	.38***
(性別)	.06	.08
R ²	.15***	.16***

*** p<.001, ** p<.01

登校回避行動には日常生活不安と大学不適応が有意な正の影響を及ぼし、評価不安が有意な負の影響を及ぼした。また、登校回避感情には大学不適応が有意な負の影響を及ぼした。

3) 不登校傾向とパーソナリティ (Big 5) との関連

不登校傾向尺度を従属変数としNEO-FFI人格検査と性別を独立変数とし重回帰分析を行った結果を表3に示した。

表3 不登校傾向尺度とNEO-FFIの重回帰分析 (n=250)

	登校回避行動 (β)	登校回避感情 (β)
神経症傾向	-.03	.16*
外向性	-.01	-.12
開放性	.06	.05
調和性	-.30***	-.13
誠実性	-.22**	-.17**
(性別)	-.01	-.07
R ²	.15***	.14***

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

登校回避行動には開放性と誠実性が有意な負の影響を及ぼし、登校回避感情には神経症傾向が有意な正の影響を及ぼし、誠実性が有意な負の影響を及ぼした。

4) 不登校傾向と自我同一性との関連

不登校傾向尺度を従属変数としRasmussenによる自我同一性尺度(宮下, 1995)と性別を独立変数とし重回帰分析を行った結果を表4に示した。

表4 不登校傾向尺度と自我同一性尺度の重回帰分析 (n=285)

	登校回避行動 (β)	登校回避感情 (β)
基本的信頼感 対不信感	-.17*	-.16*
自律性対恥・疑 惑	.10	-.03
自主性対罪悪 感	.01	-.01
勤勉性対劣等 感	-.14	-.18**
同一性対同一 性拡散	-.20*	-.25**
親密性対孤立	.16*	.03
(性別)	-.01	-.05
R ²	.10***	.25***

*** p<.001, ** p<.01, * p<.05

登校回避行動には親密性対孤立が有意な正の影響を及ぼし、基本的信頼感対不信感と同一性対同一性拡散が有意な負の影響を及ぼした。登校回避感情には基本的信頼感対不信感、勤勉性対劣等感、同一性対同一性拡散が有意な負の影響を及ぼした。

5) 学年差と性差

一般青年(高校生・大学生)487人のデータについて性別×学年の二要因分散分析を行った結果、登校回避行動および登校回避感情は交互作用が有意ではなく、性差も有意ではなかったが、有意な学年差は認められた。多重比較の結果、登校回避行動は高校1年から3年まで有意な差はなく、高校3年から大学1年、さらに大学1年から大学2年以上にかけて有意に高まった。

(4) 不登校傾向の予防・支援

上記の結果に基づき、不登校傾向を予防し、その傾向にある者を支援するための方策について提言を行う。

1) 不登校傾向は抑うつ・対人恐怖を中心としたメンタルヘルス上の問題と密接な関連を持つことが判明した。したがって保健管理センター等の精神的健康の維持・増進を図ることを目的とした学内機関が健康診断時にチェックリストの利用および面接等により心身の症状を把握し、必要に応じて早急に治療やカウンセリングにつなげることが重要である。特に不登校傾向は新入生に限定されるものではないことも判明したため、他の学年も含め全員を対象に実施することが求められる。

2) 不登校傾向は青年期特有の自我同一性に関する問題および対人関係にまつわる問題をはじめ多様な心理的問題と明確な関連を持つことが判明した。これらの問題に対しては学生相談室を中心にカウンセリングおよびグループワーク等の心理教育的アプローチが有効であると考えられる。しかし、全国の相談機関の大半がカウンセラー不足に陥

っているという現状を鑑みると、まずは心理臨床の専門的知見と技能を有する常勤カウンセラーの配置を積極的に推進していくことが必要である。

3) 不登校傾向は大学内の学習および生活のあり方とも有意な関連を示した。大学が FD (Faculty Development) の実効性を高め、これまで以上に魅力的な講義を展開させていくことが重要である。また、学生生活に求める学生側のニーズを十分に把握した上で、学生、職員、教員のアイデアを結集し、キャンパスライフを充実させていくことが求められる。

(引用文献)

- ・遠藤公久 開示状況における開示意向と開示規範からのズレとについて—性格特徴との関連. 教育心理学研究, 37, 20-28. 1989.
- ・藤井義久 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, 68, 441-448. 1998.
- ・福田一彦・小林重雄 自己評価式抑うつ性尺度の研究. 精神神経学雑誌, 75, 673-679. 1973.
- ・福盛英明・峰松修・馬場園明・一宮厚・永野純・藤野武彦・上園慶子 大学生の QOL の研究: 大学生用 QOL 質問票「大学生活チェックカタログ」の開発. CAMPUS HEALTH, 37(2), 55-60. 2001.
- ・堀井俊章・小川捷之 対人恐怖心性尺度の作成. 上智大学心理学年報, 20, 55-65. 1996.
- ・堀井俊章・小川捷之 対人恐怖心性尺度の作成(続報). 上智大学心理学年報, 21, 43-51. 1997.
- ・堀井俊章 対人恐怖心性尺度Ⅱの開発—対人関係におけるおびえの心性を測定する試み. 学生相談研究, 26, 221-232. 2006.
- ・堀野緑 成功恐怖の再検討. 実験社会心理学研究, 31, 61-68. 1991.
- ・堀野緑・森和代 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因. 教育心理学研究, 39, 308-315.
- ・鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討. 教育心理学研究, 30, 302-307. 1982.
- ・高坂康雅 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的变化. 教育心理学研究, 56, 218-229. 2008.
- ・松原達哉 最新 心理テスト法入門—基礎知識と技法習得のために. 日本文化科学社. 1995.
- ・宮下一博 Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討. 教育心理学研究, 35, 253-258, 1987.
- ・長尾博 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み, 教育心理学研究, 37, 71-77. 1989.

- ・中川泰彬・大坊郁夫 日本版 GHQ 精神健康調査票手引き. 日本文化科学社. 1985.
- ・西田裕紀子 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究. 教育心理学研究, 48, 433-443. 2000.
- ・落合良行 孤独感の類型判別尺度(LS0)の作成. 教育心理学研究, 31, 332-336, 1983.
- ・小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成. カウンセリング研究, 35, 57-65. 2002.
- ・PIL 研究会編 PIL テスト日本版ハンドブック. システム・パブリカ. 1998.
- ・桜井茂男・大谷佳子 “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係. 心理学研究, 68, 179-186. 1997.
- ・下山晴彦 大学生の職業未決定の研究. 教育心理学研究, 34, 20-30. 1986.
- ・下山晴彦 男子大学生の無気力の研究. 教育心理学研究, 43, 145-155. 1995.
- ・菅原健介 自意識尺度(self-consciousness scale) 日本語版作成の試み. 心理学研究, 55, 184-188. 1984.
- ・玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討. 奈良教育大学紀要(人文・社会科学), 50, 221-232. 2001.
- ・山本真理子・松井豊・山成由紀子. 認知された自己の諸側面. 教育心理学研究, 30, 64-68. 1982.

- ・吉村典子 楽観性が健康に及ぼす影響: リスクテイキング行動, 生活習慣, 楽観的認知バイアス, 健康状態との関連から. 甲南女子大学研究紀要. 人間科学編, 43, 9-18. 2007.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

①堀井俊章、大学生における不登校傾向と精神的健康度との関係、日本カウンセリング学会、2010年9月4日、文教大学越谷校舎(埼玉県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀井 俊章 (HORII TOSHIAKI)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号: 70306083

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし